

教育目標: ○元気な子 ○やりとげの子 ○考える子 ○思いやりのある子 めざす学校像: 保護者や地域から信頼される学校 めざす児童像: 子どもたちが主体的に学び活動する学校 めざす教師像: 教職員が協働して教育活動を創造していく学校

領域	中期目標	短期目標	具体的方策	努力指標 (中間)	努力指標 (最終)	成果指標 (中間)	成果指標 (最終)	今後の課題	学校関係者評価記入欄
豊かに表現する力を育てる教育の充実	考え、豊かに表現し、実践できる力を育成する。	○情報活用能力を育成するための活動を充実させ、豊かな表現力と実践力を育成する。	○NIEや図書資料の活用とともに、GIGA スクール構想による1人1台のタブレット型PCやICTを活用した授業改善を図り、情報活用能力のより一層の伸長を図る。 ○校内研究では国語科を中心として児童に情報収集・整理・分析・表現・発信できる力を育成する。	3		4		☆情報収集の際、必要な情報か、また正しい情報なのかを見極める学習は今後さらに積み上げていく必要がある。 ☆自分で表現方法や学習課題を選択できるような授業展開を模索する。	・インターネットは知りたい情報のみ得られるが、新聞は多種多様な情報があり、そこから興味関心が広がっていく良さがある。新聞を購読する家庭も少なくなっている。多くの情報から選択する力も育成するため、これからも学校で情報活用能力を育成する取組を継続して行ってほしい。 ・1人1台タブレットはあくまでもツールの一つとして捉え、活用して良かったものはぜひ教員同士で共有して行った方がよい。
			○図書館の活用、地域教材の開発や地域人材の活用を通して、学ぶ楽しさと学び方を指導する。 ○東京ベーシック・ドリルを活用して反復学習を習慣化し、未習熟事項を残さない。 ○習熟度別指導、算数補習教室を実施し、個別最適な学びの充実を図る。					2	
保護者・地域と連携した学習や活動の開発	地域社会との連携を深めた教育活動を展開する。	○分かりやすい言葉で、保護者・地域の方々へ積極的に情報発信する。 ○保護者・地域からの情報を生かし、児童が地域のためにできる学習活動を模索し、開発する。 ○地域の特性を生かした「国分寺学」の創出に向け、小・中連携教育の推進を図り、各教科等において授業改善を進め、学力の向上を図る。	○ブログやスクールメール、デジタル連絡ツール「スクリーン」を活用し、日々の教育活動を積極的に発信する。 ○コミュニティ・スクール協議会等の意見を生かしながら、地域の期待に応える教育活動を推進し、地域との連携を図った教育活動を発展的に継続する。 ○地域の人々などと触れ合う学習を計画して多様な価値観や生き方に触れる機会をつくる。 ○小・中連携事業として一中学区小中学校において、国分寺市を知り、郷土を愛する心情を育てる。	2		4		☆今後、中学校区を核として、国分寺学の意識化を図っていく。 ☆中学校区では地域人材について情報を共有するとともに、9年間のつながりを大切に教育環境の整備を行っていく。 ☆新たな地域素材の開発を目指す。	・地元出身の先生は少なく、国分寺を深く理解するのは難しい面もある。国分寺学の実施にあたっては、学校全体、そして市として共通理解を図りながら、しっかり取り組んでほしい。 ・地域素材の開発については教員が行っていくのは難しいのではないかと。 ・国分寺学とは幅広い内容であるため、全てを行おうとすればどうしても深く広くなりがちである。このため、学校で国分寺学の中から優先的に取り組む焦点を絞り、それを深めていくのが良いのではないかと。ぜひ国分寺学を通して国分寺を愛する気持ちを育ててほしい。
			○10月末の周年行事へ向けて、保護者・地域に積極的に協力を仰ぐため、学校だよりに学校ボランティアを募集するQRコードを掲載し、周知徹底を図る。 ○周年記念集会では、PTAと共に子どもたちの心に残るような企画立案や、卒業生である保護者や地域の方に講演を依頼し、地域とともに祝う周年行事を目指す。					2	
豊かな心を育てる教育の充実	人権尊重の精神を育成し、豊かな心を育てる教育を充実する。	○自尊感情の向上を図る。	○「自分を大切に 友だちを大切に 一人一人を大切に 国分寺を大切に」を五小の合言葉に、互いのよさを認め温かい声掛けのできる学級づくりを行う。 ○道徳教育は教育活動全体を通して継続して取り組み、授業のキーワードを記入した記録を教室に掲示する。 ○特別支援教室担当教員を中心に特別支援教育の理解教育に努め、教職員・児童のみならず、保護者・地域にも特別支援教育の理解を深める。	3		4		☆学校が楽しいと思えるよう、協働し認め合える学級運営をめざす。 ☆休み時間にも児童と積極的にコミュニケーションを図るなど、児童理解を深める取組を充実させる。 ☆道徳の授業で学んだことを実生活にもつなげていけるような働きかけを工夫する。 ☆理解教育は今後も定期的に継続して行っていく。	・コロナ禍では学校でも多くの制約があったが、授業参観では子どもたちの素直な歌声や楽しそうに過ごす様子が見られて安心した。異年齢の中で育つ力もあると思う。今後、行事等も含め、教育活動も通常化していく中で、子どもたちに豊かな体験をたくさん行ってほしい。 ・外国籍の子どもは言葉の壁などで学校生活に馴染めない等の課題はないのか。 ⇒言葉の壁については市より日本語の学習サポートを要請している。
			○保護者・地域と連携し、学校・家庭・地域において、適切な言葉遣いや挨拶のできる環境を整え、実践力を育てる。 ○クラブ活動や児童会活動、縦割り班活動等の充実を図り、異学年活動を通して交流を深めることで帰属意識を育む。					4	